



くごりお特賞!

無双ハレム権

Grand Prize: Unrivalled
HAREM TICKET

三木なずな

Illust. 瑠奈璃亜

発売日記念 特別書き下ろし短編

777倍主人公、秋葉原に立つ!

期間限定くじ引きの特等賞「一日現実世界戻る権」を使って、ミウと一緒に現実世界に戻ってきた。

「ここがご主人様の故郷ですか」

「……微妙に違う」

現実世界には戻ってきた、戻ってきたが、そこは日本じゃなかった。

野外のお祭り会場、やけにガタイのいい外国人達、どこを見ても英語の各種看板と垂れ幕。

「アメリカか？」

多分そうだと思った。意識してまわりの会話を拾うと明らかに全員が英語を喋ってる。

「ご、ご主人様っ」

ミウの切羽詰まった声が聞こえる。見ると、数人の大男に取り囲まれている。

「オウ、メイドッ！」

「ジャパニーズケモミミメイド！」

「MOE! COOL! AKIHABARA！」

男達はミウを囲んで大興奮だ。

言葉の内容から好意的なのは間違いないが、血走った目で詰め寄られたミウは怯えてしまっている。

「ミウ、こっち来い」

「——はいッ！」

ミウの肩を抱いてそこから連れ出した。

背後から「オッフウ、グレートゴシユジンサマエ」とかいう意味不明な台詞せりふが聞こえたから、さっさとそこから離れることにした。

とはいえ、どこにいけばいいのか。

ふと、ミウの視線がある方向に釘付けくぎづけになつてゐるのに気づいた。なんだか物欲しそうな目だ。
「どうしたミウ」

「い、いえ。何でもありません」

慌あわてて顔を伏せるミウ。明らかになんでもないって様子じゃない。

ミウが見てた方向を向く。そこにメイド服があった。

いろんな物が賞品として並んである場所にそれがある、フリルがたっぷり使われてる、かなり可愛らしいメイド服だ。

今でもミウはそれをちらちらのぞき見してる。

「あれが欲しいのか？」

「いえ、そんなことは——」

慌あわてて否定するが、明らかに物欲しそうだ。

よし。

ミウを連れただままそこに向かっていった。受付っぽいところにいる男に話しかける。

「えっと、エクスキューズミー？」

「あら、日本人？」

流暢な日本語で返事をされた。

さっきの男たちとよく似てる、筋肉もりもりの大男だけど、こっちは喋りも見た目も完全に日本人で、何故か妙に言葉使いが妖しい感じだ。

「日本語がわかるのなら話が早い。あのメイド服はなんかの賞品か？」

男はミウと、おれが指したメイド服を交互に見比べる。

すぐに納得して、ニヤニヤした。

ま、そういうことだ。

「そおよ。大会の優勝賞品なの。あなたも参加する？」

「ああ」

「名前は？」

「結城カケル」

「カケルちゃんね。はいエントリー完了」

エントリーをすませて、参加者がいるところに移動した。

ロングテーブルがあつて、おれは自分の席に座らされた。

横には大男が何人も並んで、そいつらは自信たっぷりな顔で立ってる。

目の前に盛り上がってる観客達が大勢いる。

そこに、料理が運ばれてきた。大皿おわぞうに載った山盛りのホットドッグだ。

「ご、ご主人様。これは……?」

「なるほど、ホットドッグ早食いの大会か」

この光景はテレビで見たことがある。外国のフードファイト、山のようなホットドッグを時間内でどれだけ食べられるかを競うやつだ。

司会者の男がでてきて、マイクを使って英語で何かを言った。

直後にブザーが鳴って、参加者が一斉いっせいに食いだした。

ほとんどの参加者が立って食ってる。テレビで見たことがある、体をリズムカルに揺らしながらホットドッグを口に運ぶ。

それを見た観客達が大いに盛り上がってる。

さて、おれも食うか。

「ミウ、こっち来い」

ミウに手招きして膝ひざの上に座らせる。

「もふもふするぞ」

「——はい！」

おれは座ったまま、ミウをもふもふしながらホットドッグを食べ出した。

もふもふ、モグモグ。

もふもふ、モグモグ。

安定したペースで食べていった。

参加者の背後に電光掲示板があつて、そこに食べた数が表示される。

最初は出遅れたが、三十個までいった時点で数が並んだ。

横の男に睨まれた。敵意剥き出しの目だ。

そいつは意気込んでペースを上げた。

二つまとめて口の中に押し込む、更に体を揺らす。

「ういよいよいよいよ！」

なんか奇声も上げた、それによって観客が盛り上がった。

一方のおれはマイペースだった。

もふもふ、モグモグ。

もふもふ、モグモグ。

一もふ一モグくらしいのペースでゆっくり食べ続ける。

一時は引き離されたが、五十くらしいのところでまた追いついた。

また睨まれたが、向こうは苦しそうだった。

ペースは上がらない、むしろ止まった。

もふもふ、モグモグ。

もふもふ、モグモグ。

六十越えたところで完全に抜いた。

「メイド・スタイル！」

「ジャパニージング！」

「KOBAYASHI！」

観客の声援が完全にこっちに来た。

小林じゃないけどね。

おれは食い続けた、ミウをもふもふしながら食い続けた。

まわりが完全に止る、おれのワンマンショーになった。

それでもひたすらもふモグするだけ。

そして——タイムアップ。

おれの後ろの電光掲示板は「140」って表示され、観客がものすごい熱狂ねっきようした。

「終わったのですかご主人様」

「ああ。世界記録のざっと二倍だな」

「さすがご主人様です」

胃袋はまだ三分目つてところか。胃袋も777倍でまだまだ余裕よゆうがある。そのうち限界に挑戦してみてもいいかもしれないと思う。

それはともかく。

優勝賞品のメイド服を手に入れて、それをミウに着せた。

「ど、どうですかご主人様」

恥はずかしそうだったけど、そこにいたのは、かつてないくらいかわいいケモミメイドだった。

原 作 小 説 は こ ち ら



777倍の能力を手に入れたカケルが、異世界で
国を救い女王と姫を侍らせるチートハーレム物語!!

「欲しいものは全て手に入れる！欲望の全てを満たしてやる！」
くじびきによって突然異世界へと転移したカケルは、すべての
能力が777倍になるチート能力を手に入れた。
パワーが777倍で最強。魔力も、777倍で無敵。
男の器も777倍で最早ハーレムルートも確定済み！
web小説投稿サイト発、国を救い女王と姫を侍らせる大人気
チートハーレム物語。書き下ろし短編も収録して、ここに開幕！

全国書店で大好評発売中!!